フルシチョフ修正主義に反対するたたかいを最後までおしすすめよう

『国際共産主義運動の総路線についての提案』
発表二周年を記念して

1965.6.14

65-8-20 北京放送局より

外文出版社
北京

フルシチョフ修正主義に反対するたたかいを最後までおしすすめよう

『国際共産主義運動の総路線についての提案』
発表二周年を記念して

『人民日報』編集部
『紅　旗』誌編集部

(1965年6月14日)

外文出版社
北　京

フルシチョフ修正主義に反対するたたかいを最後までおしすすめよう

『国際共産主義運動の総路線についての提案』発表二周年を記念して

『人民日報』編集部
『紅旗』誌編集部

（一九六五年六月十四日）

時がたつのはまったくはやいものである。中国共産党中央委員会が、『国際共産主義運動の総路線についての提案』を発表してから、まる二年になる。

二年という年月は、国際共産主義運動史の長い流れのなかでは、ほんの一瞬にすぎない。だが、なんと闘争のはげしかった二年であり、なんと変化の大きかった二年だろう！

二年まえ、フルシチョフをかしらとするソ連共産党指導部は、ソ連共産党第二十回大会と第二十二回大会でもちだした例の修正主義路線、つまり、「平和共存」、「平和競争」、「平和移行」、「全人民の国家」、「全人民の党」という総路線を兄弟党におしつけるために、国際共産主義運動のなかによこしまな風を吹きまくった。かれらは、大がかりな反中、反共、反人民の進軍ラッパをたてつづけに吹きならした。かれらは、ヨーロッパの

五つの兄弟党の大会で、マルクス・レーニン主義反対の大がかりなみにくい狂言を演出した。かれらは四十余りの共産党を指揮して、中国共産党とその他のマルクス・レーニン主義政党に気ちがいじみた攻撃をくりひろげた。これらすべてのその権幕たるや、まさに「黒雲城（コクウンジョウ）を圧し城くずれんと欲す」ほどの勢いをもっていた。

中国共産党中央委員会が、一九六三年六月十四日にうちだした『国際共産主義運動の総路線についての提案』は、革命のたいまつを高くかかげ、フルシチョフ修正主義の幾重もの黒雲をつきやぶって、マルクス・レーニン主義の純潔をまもった。

中国共産党中央委員会のうちだした『国際共産主義運動の総路線についての提案』はソ連共産党中央委員会の一九六三年三月三十日付書簡にたいする回答であった。ソ連共産党中央委員会はその書簡のなかで、現代における一連の重大な問題について、自己の観点を系統的にもちだし、とくに、国際共産主義運動の総路線の問題をもちだしてきた。中国共産党中央委員会は、この問題がもちだされたのは、まことに結構なことだと考えた。なぜなら、ソ連共産党第二十回大会いらい、われわれおよびすべてのマルクス・レーニン主義政党とソ連共産党指導部との意見の相違は、あれこれの特定の問題での意見の相違ではなく、現代の世界革命における一連の根本問題での原則的な意見の相違、つまり国際共産主義運動の総路線にかんする意見の相違だからである。これらの意見の相違は、実質的には、依然として帝国主義、資本主義制度の下におかれている世界人口の三分の二を占める人民が、革命をおこなう必要があるのかないのか、またすでに社会主義の道を歩んでいる世界人口の三分の一を占める人民が、革命を最後までおしすすめる必要があるのかないのか、ということである。これは、国際共産主義運動全体とすべてのプロレタリア政党が、まもらなければならないもっとも基本的な原則、はたさなければならないもっとも根本的な任務とかかわっている。

中国共産党中央委員会は、『国際共産主義運動の総路線についての提案』のなかで、マルクス・レーニン主義の革命学説を堅持し、十月革命の共同の道を堅持し、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明の革命的原則を堅持して、一方で、フルシチョフ修正主義の理論と総路線を系統的に解剖し、マルクス・レーニン主義をうらぎり、プロレタリア世界革命の事業をうらぎったその本質をあばきだすとともに、他方では、現代における世界の矛盾と現代の世界革命にかんする一連の問題にたいして、マルクス・レーニン主義的な分析と回答をおこない、フルシチョフ修正主義の総路線と根本的に対立する、マルクス・レーニン主義的な国際共産主義運動の総路線をうちだした。

中国共産党中央委員会のうちだした国際共産主義運動の総路線は、概括していえば、つまり全世界のプロレタリアートが連合し、全世界のプロレタリアートと被抑圧人民・被抑圧民族が連合して、帝国主義と各国反動派に反対し、世界平和、民族解放、人民民主主義、社会主義をたたかいとり、社会主義陣営をうちかため、強大にし、一歩一歩プロレタリア世界革命の完全な勝利を実現し、帝国主義もなく、資本主義もなく、搾取制度もない新しい世界をうちたてるというものである。

この総路線は、各国人民が断固として革命闘争をおしすすめ、プロレタリア世界革命を最後までおしすすめるための総路線であり、また各国人民がもっとも効果的に帝国主義に反対し、世界平和をまもるための総路線でもある。これは、革命の完全な勝利をかちとることができるばかりでなく、世界の永久平和をかちとることのできるマルクス・レーニン主義的な総路線である。

中国共産党中央委員会の『国際共産主義運動の総路線についての提案』は綱領的な文書である。それは、現代の世界革命の一連の重大な問題で、マルクス・レーニン主義とフルシチョフ修正主義とのあいだに一線を画し、フルシチョフ修正主義反対の闘争のために理論面で大きな貢献をした。

『国際共産主義運動の総路線についての提案』が発表されたことは、フルシチョフ修正主義反対の闘争が新しい段階に入ったことをしめしている。このときいらい、中国共産党は、その他のマルクス・レーニン主義的兄弟党とともにフルシチョフ修正主義にたいして公然たる大論戦をくりひろげ、全面的な大反攻に出た。これはマルクス・レーニン主義と現代修正主義との闘争の一つの重大な転換点であった。これはフルシチョフ修正主義が、発生、発展から、完全な破産に向かう転換点であった。これはまた第二次世界大戦後の現代修正主義の思潮が、発生、発展から、完全な破産に向かう転換点であった。

中国共産党中央委員会の『国際共産主義運動の総路線についての提案』が発表されてからの二年間は、全世界のマルクス・レーニン主義政党とマルクス・レーニン主義者がフルシチョフ修正主義者にたいして空前の規模で公開論戦とはげしい闘争をくりひろげた二年間であった。そのうち、はじめの十六ヵ月間は、主としてフルシチョフをかしらとするソ連共産党指導部にたいする闘争であり、あとの八ヵ月間は、主としてフルシチョフなきフルシチョフ修正主義を実行するソ連共産党の新指導部にたいする闘争であった。闘争の過程は、フルシチョフ修正主義がたえず暴露され、たえず破産してゆく過程であり、またマルクス・レーニン主義がたえず発展し、たえず勝利してゆく過程でもあった。

二年らいの公開論戦とはげしい闘争は主として三つの問題をめぐっておこなわれた。

第一の問題は、革命的なマルクス・レーニン主義か、それとも革命に反対する修正主義かの問題である。われわれが国際共産主義運動の総路線についての提案をうちだしたあと、フルシチョフ修正主義者は、『ソ連共産党中央委員会がソ連共産党各級党組織と全共産党員にあてた公開書簡』を発表して、かれらの「平和共存」、「平和競争」、「平和移行」、「全人民の国家」、「全人民の党」の総路線をやっきになって擁護し、中国共産党とその他のマルクス・レーニン主義政党にたいしてほしいままに攻撃をくわえた。この公開書簡の最大の効能といえば、すべてのマルクス・レーニン主義者にフルシチョフ修正主義を公然と暴露する権利をあたえてくれたことであり、また、フルシチョフ修正主義の総路線を系統的に批判するための逆の面からの材料を提供してくれたことである。フルシチョフ修正主義者は、おとぎ話にでてくる運の悪い魔法使いのように、自分で呪文をとなえて「悪魔」を呼びだしておきながら、それをもとへもどせなくなったのである。各国のマルクス・レーニン主義者はそれぞれ異なった方式でフルシチョフ修正主義者と論戦をおこなった。われわれは、十ヵ月のあいだに九つの論文を書いて、ソ連共産党中央委員会の公開書簡に論評をくわえた。われわれは現代の国際共産主義運動における一連の重大な原則問題について、事実をあげ、道理を説いて、フルシチョフが身にまとっていたマルクス・レーニン主義のベールをすっかりはぎとり、マルクス・レーニン主義の裏切り者としてのかれの正体を、全世界人民のまえにいっそう暴露した。

第二の問題は、全世界人民と連合してアメリカ帝国主義とその手先に反対するか、それとも、アメリカ帝国主義およびその手先と連合して全世界人民に反対するかの問題である。フルシチョフ修正主義者は公開書簡を発表したのち、一連の裏切り行為をおこなった。その中でとくにきわだったものは、米英両国と部分的核実験停止条

約を結んだことである。これはフルシチョフ修正主義者がソ連人民の利益、社会主義諸国人民の利益、全世界の平和を愛する人民の利益を売りわたしたことを大いに暴露した。中国共産党と全世界のマルクス・レーニン主義者はこの条約とその他の裏切り行為をしっかりととらえて、フルシチョフ修正主義者が戦争勢力と連合して平和勢力に反対し、帝国主義勢力と連合して社会主義勢力に反対し、アメリカと連合して中国に反対し、各国の反動派と連合して世界各国人民に反対していることをあますところなくあばきだした。事実は、ソ・米が協力して世界を牛耳ることが、フルシチョフ修正主義の総路線の眼目だということを実証している。

第三の問題は、団結か、それとも分裂かという問題である。フルシチョフ修正主義者はマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義をうらぎっており、史上最大の分裂主義者である。かれらは、一九六四年二月、ソ連共産党中央委員会総会をひらいて、反中報告と反中決議をおこない、中国共産党にたいして「集団的措置」をとると公言した。ついで、かれらは兄弟党の国際会議とその準備会議を一方的にひらくことをやっきになって画策し、国際共産主義運動を公然と分裂させようとした。中国共産党は、その他の多くの兄弟党とともに、かれらの分裂の陰謀を徹底的にあばきだし、断固としてかれらの分裂会議をボイコットした。中国共産党中央委員会は、ソ連共産党中央委員会にあてた一九六四年七月二十八日付の書簡の中でつぎのように指摘した。「あなたがたのいわゆる大会開催の日こそ、あなたがたが墓場にはいるときである」、と。

フルシチョフ修正主義者は、理論面での裏切りから行動面での裏切りへと突きすすみ、政治面での分裂から組織面での分裂へと突きすすみ、一歩一歩破滅の道を歩んでいった。事態の発展はじつにはやく、われわれがソ連共産党中央委員会の公開書簡に論評をくわえる一連の論文をまだ書き終わっていないというのに、またソ連共産党指導部の分裂のちっぽけな会議をひらくところまでまだこぎつけていないというのに、フルシチョフは、さっさと歴史の舞台から追いだされてしまった。

ここ二年らい、アメリカをかしらとする帝国主義の侵略的本性がいっそう暴露されたこと、アジア、アフリカ、ラテンアメリカおよびその他の地域の人民の革命闘争がいっそう発展したこと、フルシチョフ修正主義がたえず破産していったこと、マルクス・レーニン主義がたえず勝利していったこと、これらすべてのことは、われわれのうちだした国際共産主義運動の総路線が正しかったこと、フルシチョフ修正主義に反対する闘争が必要であったことを立証し、中国共産党と毛澤東同志の現代の重大問題についての観点が、実践の試練にたえうるものであることを立証した。

フルシチョフの退陣は、マルクス・レーニン主義の大きな勝利である。しかし、これは、フルシチョフ修正主義がすでになくなったことを意味しないし、フルシチョフ修正主義に反対する闘争をもうやめてもよいということを意味するものでもない。

ソ連共産党の新指導部はどうにもしようがなくなってフルシチョフをとりかえたが、かれらはフルシチョフ修正主義の衣鉢をそっくりそのままひきついでいる。かれらは、ソ連共産党第二十回大会、第二十二回大会およびソ連共産党綱領に規定されている路線は、過去においてそうであったように、また現在においてそうであるように、今後も依然としてかれらの「対内・対外政策全般にわたる唯一のゆるぐことのない路線」①であると一度ならず言明している。中国共産党と政府の代表団が十月革命四十七周年の祝賀のためにモスクワを訪れたとき、ソ

① 一九六四年十月十九日モスクワ大衆集会におけるブレジネフの演説

連共産党の新指導部はわれわれにたいし、国際共産主義運動の問題で、また中国にたいする問題で、かれらとフルシチョフとの間にはいささかの違いもないと言明した。かれらが登場してから、八ヵ月間にやってきたことはすべて、かれらがまぎれもなくフルシチョフの足あとにそって歩いており、そのやっていることがフルシチョフなきフルシチョフ修正主義であることをこのうえもなくはっきりと示している。

フルシチョフは退陣したが、フルシチョフと入れかわった連中がやっているのもあいかわらずフルシチョフの例のふるいしろものである。このことはべつに不思議なことではない。マルクス・レーニン主義者は、フルシチョフ修正主義が生まれたのは特定の人びとの問題でもなければ、偶然の現象でもなく、それには深い社会的な根源があることを、早くから指摘している。フルシチョフ修正主義はソ連国内の資本主義勢力の氾らんの産物であり、帝国主義の政策の産物でもある。

フルシチョフが登場してから、この大野心家がソ連の党と国家の指導権を一歩一歩のっとるにつれて、ソ連社会の新しいブルジョア分子は一歩一歩ソ連人民と対立するブルジョア特権階層を形づくっていった。この特権階層がフルシチョフ修正主義集団の社会的基礎なのである。そしてフルシチョフ修正主義集団は、この特権階層の政治的代表なのである。

ソ連の特権階層がフルシチョフをとりかえたのは、けっしてフルシチョフが修正主義をおしすすめたからではなくて、フルシチョフのやり方が、あまりにもおろかで、あまりにも鼻もちならないものであり、そのため内外ともに苦境におちいり、身内のものをもふくむすべての人からみはなされ、うらみ言が巷にみなぎり、いたるところに危機がはらみ、どうにもやってゆけなくなったからである。修正主義路線は、もともとオンボロ車である

のに、フルシチョフというこのそそっかし屋のおろか者がこのオンボロ車を危つかしく運転するものだから、いきおいソ連の特権階層の支配的地位がおびやかされずにはおかなかったのである。こうして、フルシチョフ自身がフルシチョフ修正主義をおしすすめてゆくうえでの足手まといになってしまったので、ソ連の特権階層の利益をまもり、ひきつづき修正主義路線をおしすすめてゆくためには、どうしてもフルシチョフを追いだして、他のものにとりかえなければならないというような事態が生まれたのである。

その実、フルシチョフにとってかわった新指導部というのが、そもそもフルシチョフの昔仲間でしかないのである。その中核的人物の政治的生涯はフルシチョフと切っても切れない関係にある。フルシチョフといっしょになってスターリンに大いに反対し、資本主義の復活を大いにやってきたのは、ほかならぬかれらではなかったか？　フルシチョフといっしょになって中国共産党やその他のマルクス・レーニン主義の兄弟党に大いに反対してきたのは、ほかならぬかれらではなかったか？　フルシチョフといっしょになって社会主義陣営、国際共産主義運動を分裂させてきたのは、ほかならぬかれらではなかったか？　フルシチョフといっしょになってアメリカ帝国主義とぐるになり各国人民の革命闘争に反対したのも、ほかならぬかれらではなかったか？

いまこれらのふるい人物たちは、どのようにして、自分たちを新しい人物にめかしあげるかというじつにやっかいな問題にぶつかっている。かれらは、フルシチョフを追いだしたのだから、なんらかの格好をつけ、いくつかの小手先も使って、自分たちがフルシチョフとは違うのだということをみせかけなければならなくなっている。だが、フルシチョフと同様、ソ連のブルジョア特権階層の政治的代表である以上、かれらは、いやでもこの特権階層の利益にもとづいて事をはこぶほかなく、修正主義の路線を実行するほかない。この根本的な問題で、

フルシチョフとなんらかの違いがあるということはありえない。だからこそ、この八ヵ月らい、かれらは、自己矛盾の苦境のなかで毎日をおくってきたのである。

かれらは、自分が先にいったことと後でいったこととの矛盾についてどうにも説明できないでいる。かれらは、今日はこういったかと思うと、明日はまたああいうというふうに、いつも自分で自分の横っつらをひっぱたいている。かれらは、アメリカ帝国主義は「侵略者」であり、「国際的憲兵」であり、「現代の戦争と侵略のおもな勢力」であるなどといったかと思うと、ジョンソン政府は「良識派」で、「穏健派」であり、「現実的な措置をとって世界の政治的雰囲気をいちだんと改善する」①ことをジョンソン政府に期待することができるなどといっている。かれらは、アメリカ帝国主義に反対するといったかと思うと、ソ連とアメリカとの間には、「ひじょうに広びろとした協力の天地」②がひらかれているなどといっている。かれらは、ときには、アメリカのベトナム侵略を非難すると表明しはするが、結局は、きまったように「ソ・米関係の改善」というところにおちつき、世界のあらゆる問題をみなかれらの「ソ・米協調」の軌道にくみ入れようとしている。

かれらはまた、そのいっていることとやっていることとの矛盾についても、どうにも説明できないでいる。

——かれらは、全世界人民とともにアメリカ帝国主義に反対するといっておきながら、なぜまたアメリカ帝国主義と頻繁に接触し、むすびつきを強め、情報を交わしあい、ぴったりと心をよせあって、各国人民の革命闘争にたちむかわなければならないのだろうか？

① 一九六四年十一月五日付ソ連『イズベスチヤ』紙評論員の論文

② 一九六四年十二月七日国連総会におけるグロムイコの発言

——かれらは、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放運動を支持するといっておきながら、なぜまたアメリカといっしょになって国連常設部隊の設置を画策し、各国人民の革命闘争を弾圧する国際憲兵を組織しなければならないのだろうか？

——かれらは、兄弟党、兄弟国の団結を強めるといっておきながら、なぜまた国際共産主義運動を分裂させるきわめて重大な措置をとって、三月の分裂会議をひらいたのだろうか？

——かれらは、兄弟党、兄弟国との関係を改善するといっておきながら、なぜまた、アルバニアにたいするフルシチョフの大国排外主義の政策をとりつづけて、あやまりを認めようとしないのか。なぜまた、国内外であいかわらず反中宣伝・反中活動をつづけ、さらにアメリカの寵愛を一身にうけているシャストリをクレムリン宮の演壇にたたせて、中国を攻撃させることまでするのだろうか？　なぜまた、日本共産党、インドネシヤ共産党、その他のマルクス・レーニン主義的兄弟党にたいして、転覆、破壊活動をつづけ、はては日本共産党の裏切り者志賀のやからに公然とテコ入れをし、しかもやっきになって神山の選挙活動を手助けするのだろうか？

かれらは、また自分が先にやったことと後でやったこととの矛盾についても、どうにも説明できないでいる。かれらは、一方では、ベトナムを援助するようなそぶりをいくらかみせながら、他方では、事前にこうした「援助」計画をアメリカ人にもらしている。しかも、ワシントン、ロンドン、パリでさかんに平和交渉の活動をすすめ、苦心さんたんしてアメリカ侵略者のために「活路」をさがしてやっている。これは、われわれがなんども暴露したように、かれらのベトナム「援助」なるものは、ただベトナム問題をソ・米協力の軌道にのせるための資本かせぎにすぎないのではないだろうか？　アメリカ帝国主義者は、ソ連の兵器がベトナムにもちこまれること

は、「人びとをはげます要因であり」、「穏健な役割をはたすであろう」などといい、また、「米・ソ両勢力が直接対峙することは、ベトナム問題の解決をはかる交渉を早めることさえできる」①などともいっているが、アメリカ帝国主義者のこうした論調は、深く考えさせられるものがある。

要するに、ソ連共産党の新指導部のさまざまな自己矛盾のあらわれのなかには、その実、地金をだしたものといつわりのものとが入りまじっており、地金をだしたものもあればいつわりのものもあるという具合である。ある現象は、本質を反映しており、それは地金をあらわした現象である。ある現象は、本質を反映できず、それはいつわりの現象である。かれらは、安っぽい芸当をたくさんやり、人をあざむく作品を随分と創作してきた。だが、いくら手を変え品を変えても、本家本元はあらそわれないもので、その本質は、やはりフルシチョフ修正主義であり、やはり分裂主義と大国排外主義であり、ソ・米が協力して世界を牛耳ろうというものなのである。かれらがおしすすめているのは、フルシチョフよりもっと隠蔽された、もっとずるがしこく、もっと危険な修正主義である。

反動的で、くさりはてた勢力が、ずるがしこい手口で、進歩的で革命的なスローガンを盗用し、それで自分のうわべをかざりたて、大衆をだまし、自分の反動的な目的に奉仕させようとするようなことは、歴史の上でしばしば見うけられたことである。第二インターナショナルの修正主義者は「マルクス主義」という看板をかかげてプロレタリア革命をうらぎった。メンシェビキは、ボルシェビキがうちだしたソビエトについてのスローガンをとりこんで、ブルジョアジー独裁をうちたてようとした。チトーは、「社会主義」という看板をかかげて資本主

① 一九六五年四月十七日付『ワシントン・ポスト』紙

義を実行している。現在、ソ連共産党の新指導部がうっているのもやはりこうしたたぐいの芝居にほかならない。かれらがマルクス・レーニン主義者のうちだしたいくつかのスローガンをとりこんでいるのは、ある種のいつわりの現象をつくりだして、ひきつづき修正主義路線をおしすすめようとするかれらの本質をおおいかくすためのものにほかならない。

世界における階級闘争はいりくんでいて複雑なものであり、階級闘争の中にあらわれるさまざまの現象は、なおさらいりくんでいて複雑なものである。われわれは、いりくんだ複雑な現象の中から、いつわりのものをとりのぞいてほんとうのものをのこし、表面から内部へ奥深くつっこんで追及する仕事を真剣にすすめることによって、はじめて事物の本質をみきわめることができる。事物の本質を把握したあとではじめて客観的事物を全般にわたってわりに深く、わりに正しく認識することができる。マルクス・レーニン主義はわれわれの望遠鏡であり、顕微鏡である。それは、われわれが事物の現象をとおして、その本質をつかむのをたすけてくれる。フルシチョフ修正主義となん年ものつきあいをしてくるなかで、われわれもいく分利口になった。われわれは、フルシチョフを見わける経験をつんでいたので、フルシチョフのあとつぎの本質を見わけるのも比較的容易になり、かれらのつくりだすみせかけの現象にまどわされないようになった。

いま、中国の共産主義者のまえによこたわっている問題は、フルシチョフ修正主義反対の闘争を最後までおしすすめるか、それとも中途半ぱでやめてしまうかという問題である。

フルシチョフ修正主義者は、息継ぎの時間をかせいで元気をとりもどし、元手をたくわえ、これまでよりいっそうはげしく修正主義をおしすすめるため、ありとあらゆる手をつくしてマルクス・レーニン主義と修正主義と

のけじめをぼやかし、修正主義反対闘争をやめさせようと夢みている。われわれは、かれらの願望に反して事をはこび、勝に乗じて追いうちをかけ、フルシチョフ修正主義に反対する闘争を断固として最後までおしすすめていかなければならない。

このところ、ソ連共産党の新指導部は、「団結」うんぬんといった聞こえのよい言葉をさかんに口にしている。横暴にも三月分裂会議を開催し、国際共産主義運動の団結を一手に破壊してきたものが、こんにち、にわかに「団結」の歌を高らかに歌いあげるとは、まったく滑稽至極で、おかしなことではないか、などと考えてはならない。これはただたんに、滑稽だといってすまされるものではない。かれらはじつに腹黒い魂胆をいだいているのである。かれらは、アメリカ帝国主義の気ちがいじみた侵略をまえにして、革命勢力の団結強化をのぞんでいる全世界人民の気持ちにつけこんで、投機をおこなおうとしているのである。かれらは、情勢にせまられて、やむなくやり方を変えなければならなくなっている。つまり、フルシチョフのように、公然と、露骨に、乱暴に高圧政策をとり、兄弟党を強迫してかれらの修正主義路線に屈従させるというようなことはせず、全体の利益のために自分の意志をおさえているかのようによそおって、修正主義に反対するマルクス・レーニン主義者の闘志を弱めようとしている。かれらのいう「団結」とは、一皮むけば、われわれに修正主義に反対しないようにさせ、修正主義を暴露しないようにさせて、かれらといっしょになって修正主義をやらせ、それがだめなら、せめてかれらが思う存分修正主義をやれるようにさせようというものである。

修正主義に反対する闘争で、われわれは修正主義者の強硬な手口にたちむかうとともに、その柔らかな手口にもたちむかわなければならず、かれらのどのような圧力にたいしても敢然と抵抗するとともに、またかれらのど

のようなうまい口車にものってはならない。これまで、フルシチョフはわれわれにさまざまな圧力をかけてきたが、そのためにわれわれが敢然とたちあがってかれとたたかうことができなかったということはなかった。われわれは、フルシチョフがわれわれにたいして報復するだろうということはよく知っていたが、それでも、原則的な闘争を堅持してきた。こんにち、フルシチョフのあとつぎが幾重にも偽装をこらし、いろいろと小手先をつかってきているが、だからといって、われわれがかれらにまどわされ、原則的な闘争を放棄するというようなことは許されない。それとは反対に、われわれは確固とした立場にたち、はっきりとした旗じるしをかかげることがなおさら必要となっている。

中国共産党は、マルクス・レーニン主義の党であり、厳粛な、原則性をもった党である。マルクス・レーニン主義はゆらい、「原則的な政策こそ唯一の正しい政策である」と考えている。たたかいのなかで、原則を堅持するという基礎の上で必要な柔軟性をもたせることは正しいことである。だが、柔軟性は原則に奉仕するものである。無原則的ないわゆる柔軟さ、あるいは、柔軟性を口実にして原則上のあいまいさや混乱を生みだすことはまちがいである。われわれとフルシチョフ修正主義者との間には、明らかに、一連の根本的な問題で原則的な意見の相違が存在している。フルシチョフ修正主義者は、敵味方の関係をまったくあべこべにしている。もしも、われわれが原則的な立場を放棄して、フルシチョフ修正主義に迎合したり、これと折れあったりするならば、それは実際には、かれらに化粧をほどこすことになり、かれらがソ連人民をあざむき、社会主義諸国人民をあざむき、全世界人民をあざむくのを助けることになる。また、それは実際には、かれらといっしょになって帝国主義に手を貸すことになり、歴史的なあやまりを犯すことになる。もしも、われわれがそのようなことをするなら

ば、国際プロレタリアートと全世界の革命的人民は、われわれを許さないだろう。

かつて、われわれはかなりの期間、フルシチョフ修正主義を公然とは批判しなかった。われわれは、われわれの原則的な立場を保留するという条件つきで、いくつかの問題でフルシチョフと妥協したことがある。そうしたわれわれの目的は、かれらをマルクス・レーニン主義の軌道にたちもどらせたいということであった。だが、われわれの善意も、悪意でもって報いられた。われわれは、ソ連共産党中央委員会の公開書簡に論評をくわえた論文の中で、もしある兄弟党の同志が、どうしてそのときに意見の相違の真相を知らせてくれなかったのか、どうしていくつかの問題でフルシチョフと妥協したのか、とわれわれを批判するなら、われわれは喜んでこのような批判をうけいれる、とのべたことがある。われわれにとって、これは修正主義に反対するたたかいのなかでの重要な歴史的教訓である。

ソ連共産党の新指導部にたいし、われわれはかつて希望をよせていたし、何ヵ月ものあいだ、観察し待ちつづけていた。だが、いくばくもなく、かれらはその本質を暴露して、ひきつづき修正主義の道をすすむ決意を明らかにした。このような状況のもとでは、われわれは、どうしてもマルクス・レーニン主義の理論的陣地を断固まもりぬき、フルシチョフ修正主義にたいし、まっこうから対決するたたかいを堅持しなければならない。

フルシチョフ修正主義に反対するたたかいは、国際共産主義運動の前途にかかわり、各国人民の革命闘争の発展にかかわり、全人類の運命にかかわるものである。

修正主義はゆらい、革命に反対し、革命を破壊する勢力である。革命をやり、革命を支持しようとするならば、かならず、フルシチョフ修正主義に反対するたたかいを最後までおしすすめなければならない。

修正主義はゆらい、帝国主義の社会的支柱であり、帝国主義に奉仕する勢力である。帝国主義、なによりもまず、アメリカ帝国主義に反対しようとするならば、かならず、フルシチョフ修正主義に反対するたたかいを最後までおしすすめなければならない。

修正主義はゆらい、マルクス・レーニン主義と分裂をし、革命的人民と分裂をし、革命的団結をくずす勢力である。マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を基礎とする国際共産主義運動の団結をまもり、全世界の革命的人民の団結をまもろうとするならば、かならず、フルシチョフ修正主義に反対するたたかいを最後までおしすすめなければならない。

この二年らい、現代修正主義に反対するたたかいは、ひじょうに大きな勝利をおさめた。もちろん、現代修正主義に反対するたたかいは、長期的なものであり、たたかいの過程で、なんらかの紆余曲折や困難があらわれることは避けられないことである。だが、マルクス・レーニン主義がかならず修正主義にうちかつことは、完全に断言できることである。これまで、この点は立証されてきたし、こんごもやはり立証されてゆくであろう。

フルシチョフ修正主義者は幾重もの矛盾に直面している。かれらは、自分たちとソ連の人口の九〇パーセント以上をしめるソ連人民、ソ連共産党の党員、幹部との矛盾をどうにも解決できず、自分たちと全世界の人口の九〇パーセント以上をしめる人民大衆およびマルクス・レーニン主義者との矛盾をどうにも解決できないでいる。またかれらは、断固として社会主義の道をすすむ偉大なソ連人民とアメリカ帝国主義との矛盾をどうにも解決できないし、修正主義隊列内部の相互間の矛盾をどうにも解決できないでいる。フルシチョフの政治的生涯は、ほかでもなくこれらの調和できない矛盾によって葬りさられたのである。フルシチョフの足跡についてゆく

ものは、けっして同じ運命からのがれることはできない。

マルクス・レーニン主義勢力は、フルシチョフ修正主義に反対するたたかいの中で、とりわけ、公開論戦がはじまってから、ひじょうに大きな発展をみせた。マルクス・レーニン主義の革命学説は、これまでになく広く伝えられている。マルクス・レーニン主義の隊列は、新たな鍛練にたえぬいた。修正主義に反対するたたかいをすすめているこんにち、われわれはレーニンが第二インターナショナルの修正主義に反対した経験をもち、スターリンがトロツキー、ブハーリンに反対した経験をもち、また現代修正主義、とりわけフルシチョフ修正主義に反対した経験をもっている。われわれは、これらの有利な条件を十分にいかして、フルシチョフなきフルシチョフ修正主義に断固反対しなくてはならない。

マルクス・レーニン主義者の任務は、世界を認識し、世界を改造することである。マルクス・レーニン主義者は、歴史の発展法則をつかみ、人民大衆の力にたより、革命闘争をつうじて、歴史の歯車を前進させるのである。ところが、修正主義者は、歴史の発展法則にそむき、くちはてた反動勢力の側に立って人民大衆を敵視し、革命闘争に反対し、歴史の歯車の前進をはばもうとするのである。レーニンがいっているように、「けっきょく勝利をおさめるのは、歴史的発展の力がくみしているものである」①。われわれは、フルシチョフ修正主義に反対するたたかいの完全な勝利に、かぎりない確信をいだいている。

中国共産党と中国人民は、二年前にうちだした国際共産主義運動の総路線を確固としてゆるぎなくまもりつづけるものである。われわれは、マルクス・レーニン主義の無敵の旗じるしをいっそう高くかかげ、全世界のマルクス・レーニン主義者、革命的人民とともに、アメリカをかしらとする帝国主義と各国の反動派に反対するたたかいを最後までおしすすめ、フルシチョフ修正主義に反対するたたかいを最後までおしすすめ、世界平和、民族解放、人民民主主義、社会主義事業の勝利をめざして奮闘し、帝国主義もなく、資本主義もなく、搾取制度もない新しい世界を実現するために奮闘するであろう。

① 「フィンランド人民に敵対するツァーリ」、『レーニン全集』第十六巻

フルシチョフ修正主義に反対するたたかいを
最後までおしすすめよう

1965年 初版発行 定価 40 円

出版者 外文出版社
（北京阜成門外百万莊）

発行者 中国国際書店
（北京 P.O.Box 399）

編号：（日）3050—1247 3—J—705p
00014